

受け入れること、受け継ぐこと

岸 花帆里 (不二聖心女子学院高等学校三年生)

「秋も流行のナチュかわ服、マストバイなイノセントアイテムが目白押し!」「mix コーデにピッタリのエッジィなごつめスニーカー」ファッション誌には読んだだけでは理解できないような不思議なコピーが溢れている。

写真を見れば言いたいことは分かるけど、じゃあ正しい日本語で表すとどうなるか? さしずめ「秋も流行の自然な雰囲気可愛い服、購入必須のまつさらな物品が目白押し!」「異なる雰囲気を組み合わせた服装にピッタリの鋭いかついスニーカー」・・・なんてところか。これではちぐはぐで堅苦しく、購入意欲をそそられない。やはり、ファッション誌では横文字でないと上手く表現ができない気がする。この違いはどこから来たのだろうか?

思えば私達が日常で使う日本語は、決して日本に昔からある言葉だけで成っている訳ではない。英語等の外国語の形容詞や名詞、動詞をあえて訳さずカタカナで音を表記しただけの言葉。時には英語をアルファベットのままで用いたりもする。当たり前に使っている漢字とて、元を辿れば中国からの「輸入品」であった。なぜこも日本語は外来の言葉を簡単に取り込むことができるのか。私は、受容的な日本人の性質が言語にも表された結果ではないかと思う。

日本語は「膠着語」という形式の言語である。助詞で名詞や動詞などの単語を膠のようにくっつけて合わせて文章を作る言語の意だ。これが、日本語の他言語の取り込みに大きく関係している。つまりどんな単語でも、助詞で繋ぎ合わせさえすれば一応文章として成立する。例えばドイツ語は、格によって動詞の形が変わるなどの特徴があり、文章全体が連動しているから、日本語のようにいろいろな言葉を自由に取り込むことができない。また、日本語は平仮名・カタカナ・漢字の三種類の文字があるので、文字を使い分けることが可能である。私は、カタカナの存在は、日本語に大きな影響与えたと思う。例えば新しく外来語が入ってきた時、その言葉を無理に日本語に訳さずとも、音をカタカナで表記するだけで使えるという利点は大きい。例えば中国語は、全て漢字表記の言語であるから、外来語を受け入れるためには漢字表記に直さねばならない。「電腦(コンピュータ)」のように意味を当てたり「可口可樂(コカコーラ)」のように音だけを当てたり、その作業そのものも大変だし、いくら簡体字になったといえ画数がかさみ手間がかかる。その点日本語は画数が少ないカタカナで表すことができ効率的である。

それに何より、言葉を受け入れるということは、その言葉が表す概念を受け入れるということであるから、外来語を受け入れやすいということは外来語の概念をスピーディーに受け入れられるということでもある。例えば、ア

アメリカには「肩凝り」が存在しないと聞いたことがある。勿論同じ人間だから肩が凝る症状はあるのだが、それを表す言葉がないため「存在しない」そうだ。全ての事物は、それを表す言葉なしには存在できない。名前がつけられて初めて、人間は対象を認識できる。正にはじめに言葉ありき、である。よって、日本には存在しなかった事物・概念が現れた時、すぐさま受け入れることができるということは、異文化への理解を手助けすることに繋がっていると私は考えている。

ただ同時にこの日本語の特性は同時に短所ともなる。冒頭のコピーのように、まず雰囲気ありきで、本来の意味やそれで表現することへの深い思考を必要としなくなるのは恐ろしいことだ。言葉への熟考がなくなることは文化的損失である。私達は日本固有の言葉を持っている。まずはこれを誇りとしなければならない。その上で他言語を受け入れ、うまく活用しつつ、言葉の意味を熟慮する必要がある。母語である日本語を受け継ぎ、その伝統を次世代へ伝えるための努力をしなければならないと思う。